

Carolyn Lambert and Marion Shaw, eds.,
For Better, For Worse: Marriage in
Victorian Novels by Women

(Routledge Studies in Nineteenth-Century Literature)

New York: Routledge, 2018. 217pp.

Hardcover £105, ISBN: 978-1-138-28564-4

長谷川 雅世

本書は、19世紀イギリスの女流作家が描いた結婚についての論考集である。19世紀に結婚は、友愛的な私的関係であることを求められるようになった。この結果、性差による不平等が問題視され、法律の改正や男女の個人行動の変化が希求された。その中で、結婚の本質や目的が議論され、多くの女性たちが小説を書くことでその議論に参加した。本書は、女流作家が描いた結婚の分析を通して、彼女たちの結婚に関する議論への関与と貢献の様と、彼女たちの結婚観や結婚制度観を明らかにしようとしている。

本書は、13名の研究者による14の個別の論考からなる。14の各章が扱う作家と小説は多様で、小説の出版年も19世紀全般と広範である。この各章が基本的に、分析対象小説の出版年代順に並べられている。この構成が、各時期の結婚における関心事と同時に、結婚に関する変化、或いは、変化への抵抗としての不変化を理解しやすくさせている。ただし、本稿は、扱う小説や論点の関連性を優先させた順で各章を簡単に紹介する。そうすることで、各論の関係性によって作られる本書の議論の多角性と重層性を伝えたいと願うからである。尚、第4章はGaskellの *Sylvia's Lovers* 論で、これについては最後に少し詳しく紹介する。

第1章には19世紀イギリスでの結婚に関する論争や法改正についての、最終章には過去のフェミニズムの波と文学との関係についての概説がある。これらは本書の主題に対する背景知識を与えてくれて有益である。

第1章の概説にもあるように、特に19世紀後半は、妻に不利な法の改正への要求が高まり、1857年のMatrimonial Causes Actを筆頭にそれがなされた時期だっ

た。第8章のJoanne ShattockのMargaret Oliphant考では、これが議論の中心にある。Shattockはまず、Oliphantがノンフィクション作品で表明している法改正に関連する考えを明らかにする。その後、それが彼女の*The Ladies Lindores* (1883)と*Lady Car* (1889)でどう表現されているのかを考察している。第10章のLaura Allenの論考も法改正と関係している。彼女はMary Eliza Haweisの*A Flame of Fire* (1897)を、婚姻関係での女性の無力さの原因である二重基準の法律の改正を訴える政治小説だと呼ぶ。そのような小説が、現実味を帯び読者の心に響くのは、作者の結婚生活での実体験が小説の基礎をなしているからだと結論づける。

小説中の結婚と作者自身の結婚との関連は、第2章のCarolyn LambertによるFrances TrollopeのWidow Barnaby 3部作——*The Widow Barnaby* (1839)、*The Widow Married* (1840)、*The Barnabys in America* (1843)——の論考でも指摘されている。この論点で言えば、第11章のCatherine PopeによるFlorence Marryatの3つの小説——*Her World Against a Lie* (1878)、*The Root of All Evil* (1879)、*The Nobler Sex* (1892)——の論考が興味深かった。Frances Power Cobbeのようなフェミニストたちでさえも、暴力夫を労働者階級に限定しようとしていた時代に、Marryatはそれを中流階級の問題として描き、そして非難された。この非難はそこに作者の自伝的要素を感じ取ったから、彼女が語るべきではない現実を語ったからだ。Popeは、彼女へのこのような非難は、女性の服従を維持しようとしたイデオロギーの表れだと言う。また、Marryatは中流階級の暴力夫を描くことで、中流階級の妻は夫に常に守られているという一般的な謬見を正そうとしたと言う。そして、Marryatにとってこれは、力による支配ではなく平等な結びつきとしての結婚を求める運動だったと結論づける。

夫婦間における別の暴力、妻による暴力を論じているのが、第14章のMarlene TrompによるGeorge Eliotの*Middlemarch* (1872)論である。Trompは、理想的な女性らしさを見せながら、夫に反抗し、夫に支配権を持たせない女性たちを、この小説が巧みに描いている様子を明らかにする。彼女たちは、思い通りに生きるためなら夫殺しささえも厭わない。*Middlemarch*はその可能性を暗示していて、殺意まで伴う女性から夫への暴力が、この小説における結婚の看過されてきた面だと主張する。第7章でMeredith Millerが読み解くEliotの結婚が語るものは、これとは全く違う。Millerは、*Daniel Deronda* (1876)でEliotは、3つの結婚のプロッ

トを異なった物語様式で語って縫り合わせ、最終的に国家・帝国・文化・ジェンダーを批評する大きな1枚のテキストを織り上げたと言う。

本書は、他の多くの19世紀女流作家の研究書と同様に、センセーション小説作家についての論考も含んでいる。既に挙げたMarryat以外に、Ellen WoodとRhoda Broughtonの名前が見られる。第5章ではFrances TwinnがWoodの代表作*East Lynne* (1861)を分析し、Woodは一義的には因習的なキリスト教の結婚規範を支持しているが、同時にそれから逸脱した女性主人公への同情を暗に示していると指摘する。第9章ではTamara S. WagnerがWoodの後期小説*Court Netherleigh* (1881)を考察しているが、*East Lynne*との比較で論が進められ、作家の変化が明らかにされている。Wagnerは*Court Netherleigh*を*East Lynne*の改訂版だと呼び、最も重要な変更点として性的誘惑の不在を挙げる。その結果、小説は読者が期待した*East Lynne*のようなセンセーションとロマンスを失った。しかし、だからこそ、Woodは日々の結婚生活における平凡な現実とそこにある結婚を破綻させる平凡な落とし穴を描くことに集中できたと述べる。第6章では、Carolyn W. de la L. Oultonが、Broughtonの*Cometh up as a Flower* (1867)に似たような読みを提示している。この小説はセンセーション小説の常套を巧みに利用して、破滅的でスリリングな物語展開を期待させながら、実際には、別の男性に性的に惹かれながらも夫との愛のない結婚生活を送るというより現実的な家庭の物語を語っている。Oulton曰く、Broughtonは、意図的に読者の期待を裏切ることで、規範的に見える女性の家庭内での秘められた苦闘の方が劇的であることを伝えている。

以上で挙げた小説のタイトルから分かる通り、本書は有名な小説やキャンオンと呼ばれる小説だけを取り上げているわけではない。マイナー小説を扱っているという点で際立っているのが、第12章のRebecca Stylerによる論考で、19世紀末から20世紀初めに流行した女性フェミニストたちの5つのユートピア小説——Jane Hume Clappertonの*Margaret Dunmore* (1888)、Elizabeth Burgoyne Corbettの*New Amazonia* (1889)、Amelia Mearsの*Mercia, The Astronomer Royal* (1895)、Florence Ethel Mills Youngの*The War of the Sexes* (1905)、Irene Clydeの*Beatrice the Sixteenth* (1909)——を分析している。Stylerは、これらの小説が描く社会の共通点として家母長制であることを挙げ、そこでの男女の関係は二項対立的ではなく、両者が知性や思いやりや尊敬の念を持っていると述べる。そして、

これらの小説が第一に訴えていることは、家父長社会の解体、特に結婚における男性支配の解体には、女性の男性への経済的依存を解決することが不可欠だということだ、と指摘する。

Styler の論考と第 3 章の Emily Morris による Charlotte Young の論考には、意外な類似性を発見できる。女性の劣等性を確言していた Young は、反フェミニストと称されることの多い作家である。面白いことに、その彼女が 19 世紀中葉に描いた理想の結婚には、世紀の変わり目のフェミニスト作家たちによるそれと似たところがある。Morris は、*Heartsease* (1854) と *The Clever Woman of the Family* (1865) で Young は、男性上位の結婚生活を単純に賛美しているわけではなく、彼女の創造した結婚は曖昧だと述べる。なぜならそれには、家父長的夫婦関係を女性にとっての辛い試練と見なし、家父長不在を理想としている側面があるからだ。

本書は、形式においても非主流の小説を扱っている。第 13 章は、Victoria Margree による短編小説の論考である。19 世紀の多くの女流作家たちが短編小説を書いたが、それは長編小説に比べて劣った文学形式だと見なされ、軽視されていた。しかし、だからこそ、長編小説ほどに男性編集者や批評家たちから厳しい検閲を受けることがなく、短編小説には自由があった。その自由な空間で女流作家たちは、論争を招くような結婚に関する問題について、自らの意見をよりラディカルに、或いは、より辛辣に表明することができた。このことを Margree は、7 つの短編小説——Maria Edgeworth の “The Limerick Gloves” (1804)、Laetitia E. Landon の “Sefton Church” (1834)、Rosa Mulholland の “Not to Be Taken at Bed-Time” (1865)、Edith Nesbit の “Man-Size in Marble” (1893)、Rhoda Broughton の “The Man with the Nose” (1872)、Netta Syrett の “A Correspondence” (1895)、Margaret Oliphant の “A Story of a Wedding Tour” (1894) ——の分析を通して例証している。

最後に紹介するのが、第 4 章の Marion Shaw の “Give me Sylvia, or else, I die: Obsession and Revulsion in Elizabeth Gaskell’s *Sylvia’s Lovers*” である。Miller の *Daniel Deronda* 論では、結婚のプロットが国家と帝国という大きな問題と結びついていた。*Sylvia’s Lovers* (1863) の結婚も同様の壮大さを持つ。この小説はナポレオン戦争時の 1790 年代を時代設定にし、捕鯨で栄えた港町モンクスヘイヴンを舞台にした歴史小説である。小説の中心をなしているのが、Sylvia と 2 人の恋

人 Phillip と Kinraid の愛の物語である。Sylvia は国家権力を体現する強制徴募隊によって婚約者 Kinraid と父親を奪われ、愛していない Phillip との自己抹殺の結婚生活を余儀なくされる。最終的には、2 人の恋人を、Phillip は死によって、Kinraid は他の女性との結婚によって永遠に失う。小説が最後に見せるのは、赤いコートを好んだ勝気で自由な少女が黒い服を着た生気を失った未亡人に変貌した姿である。3 人の恋人たちの物語は、国家によって翻弄され破滅させられた結婚の物語として読める。或いは、法的に抑圧や犠牲を強いられていた小説当時の女性からの国家権力への抗議だと解せる。しかし Shaw の論考が注目するのは、彼らの物語の個人的で深層的な部分である。

Shaw は *Sylvia's Lovers* の心理劇としての側面に注目し、この小説を「男性の執着心の研究」として読み解く。彼女は、主人公たちの結婚物語の筋道を決定づけて陰鬱な結末へと至らせているのが、個人の行動と決断だと言う。そしてその行動と決断を支配しているのが個々人の心理であり、特に重要なのが Phillip の Sylvia への執着心である。この執着心を、Shaw はフロイト的「強迫観念」と結びつける。フロイト曰く、強迫観念の根源は男児の最初の性愛である母親への愛情にあり、この早期に開花した性生活は痛ましい状況で終わりを迎え、「自己愛的損傷 (a narcissistic scar)」という形で永続する自尊感情への傷を残す。『『Sylvia を我に与えたまえ、さもなければ死を』という彼の情熱的な祈りは自己本位以外の何ものでもなかった』という小説の言葉が暗示するのは、Phillip の Sylvia への執着心が、自己愛者の自尊感情への感受された脅威を意味する「自己愛的損傷」であることだと Shaw は主張する。この「自己愛的損傷」による強迫観念的愛情が、フロイトが「人類の原始からの遺産」と呼ぶ近親相姦の欲望と「あらゆる生命の目的」と呼ぶ死への欲求を匂わせながら、Phillip の行動と決断を決定し、彼と Sylvia の人生を破滅させたと説明する。さらに、執着的愛ゆえに、彼は Sylvia を崇拜物にし、ユニタリアンであった Gaskell にとって罰を受けるに値する罪、偶像崇拜という宗教的罪を犯したと述べる。一方、Sylvia を支配していた心理は性的意味合いの強い「拒絶感」である。この拒絶感が絶頂に達するのが、Kinraid の拉致を Phillip が隠していたことを知ったときで、そのとき彼に「あなたを決して許さない」と言い放つ。Shaw は、Sylvia の場合は拒絶感ゆえに 2 つの罪を犯したと述べる。1 つは他者を赦さない慈愛の欠如という宗教的罪で、もう 1 つ

は献身的な良妻にならなかったという社会的罪である。Phillip と Sylvia はそれぞれ執着心と拒絶感から罪を犯したが、最終的には罪を悔い改める。Shaw はこの結末で勝利を得たのは、命という代償を払うことにはなったが、求め続けてきた Sylvia の完全なる服従と献身を手にした Phillip だと指摘する。

「男性の執着心の研究」であるこの小説には、他にも執着心に支配された男性がいる。それは Sylvia の父親である。若い頃に拉致された Daniel は、強制徴募隊を憎み、その思いに囚われている。Shaw は、彼の執着心は、外部的要因によるものである点とフロイト的ではなく一般的な執着心である点で、Phillip の執着心とは異なると述べる。しかし、この執着的憎しみからとった行動ゆえに彼は処刑され、そのことが妻と娘を困難な状況に追い込み、Sylvia は Phillip と結婚する。Daniel の場合も、Phillip の場合と同じく、執着心が女性の人生、特に Sylvia の人生に害を及ぼしているのだ。Shaw は、この 2 人の男性の執着心が Sylvia の結婚のプロットを支配していて、それが男女関係における位階と統治の構造を示していると主張する。

筆者にとってこの論考は、「男性の執着的な愛情」を論点にしているゆえに興味深かった。ヴィクトリア朝小説には、己の理性や良心や信念に反して、ひとりの女性に執着する男性がたびたび登場する。例えば、*Sylvia's Lovers* と同時代の *Great Expectations* (1860-61) の主人公 Pip だ。ヴィクトリア朝小説にこのような男性が遍在するのは、男性の執着的愛情が常に起こりうる心理だからなのか。それとも、女性らしさと同時に男性らしさの定義が模索されたヴィクトリア朝の時代性と関係があるのだろうか。このことを大いに考えさせられた。ただこの論考には、さらなる明解さを求めたい点があった。それは *Sylvia's Lovers* に読み取れる Gaskell の結婚観である。彼女が結婚を男性支配の統治構造として見ていたならば、それをどう考え、何を結婚の理想としたのだろうか。また、Shaw は Phillip を「誤った選択」と呼ぶが、では、Gaskell にとって Sylvia の「正しい選択」は何だったのだろうか。第 9 章で Wagner は、19 世紀の結婚小説の多くは、結婚で実際の問題よりも身体的魅力を重視することや結婚生活に甘い期待をすることの危険性を喚起していて、Wood の *Court Netherleigh* に至っては、結婚におけるお金の大切さを堂々と説いていると述べている。Sylvia に経済的安定を与えてくれた Phillip が「誤った選択」なら、Gaskell の結婚における重要事項は、Wood た

ちのそれとは異なっていたのだろうか。これらのことがはっきり議論されていれば、Gaskell の結婚観と同時代の結婚の現実や他の結婚観との関係がより明確になったと思う。最後に、この論考には Sylvia の娘 Bella が「オーストラリアに移住した」と書いてあるが、実際は「アメリカ」であることを指摘しておく。小説の時代設定からすれば、アメリカはイギリスから独立したばかりの国であった。Bella のアメリカ行きは、イギリス国家と社会に束縛された女性の娘に自由を与えようとしたからかもしれない。小説の執筆・出版時期を考えると、小説の最後でのアメリカへの言及は、イギリスにも影響を与えていた南北戦争を想起させるためだったかもしれない。何れにしても、Gaskell がアメリカを選んだことには意味があるので、訂正しておく。

本書の各章が読み解いた 19 世紀の女流作家が描いた結婚は、多種多様であった。それらが語る結婚における関心事、結婚の現実や結婚のあるべき姿は色々で、様々な程度で共鳴したり反発し合ったりしていた。このことが、19 世紀のイギリスで、結婚が如何に幅広いと同時に奥深い問題だったのかを示している。また、本書は、女性たちが小説を書くことを通して、どのように同時代の結婚に関する議論へ関与し貢献したかを明らかにすることを目的にしているが、その目的を十分に達成していると思う。何より、小説を丁寧に読み解いた上で、小説中の結婚をその時代の歴史的・社会史的資料とする態度に好感が持てた。本書は、19 世紀イギリスの虚構と現実の両方の結婚に関する読者の知識を広げ、視点を多角的にし、19 世紀の小説に対する新たな興味を喚起する良書だと思う。

(高知大学専任講師)